
白金の歌姫

かなめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白金の歌姫

【Nコード】

N9856U

【作者名】

かなめ

【あらすじ】

偶然襲った奴隷船。そこで海賊が出会ったのは”人魚”だった――。

別サイトで連載中。のんびり不定期更新です。

夏の暑い日の夜のことだった。奴隷船がある海賊によって襲撃された。それは奴隷の大半を占める獣人族で構成され、一般市民にも支持者の多い、そんな存在だった。

「あー、あー」

と船頭に立ち、拡声器より声を発するものがいた。この海賊団を率いる”黒狼のロイ”だ。

「奴隷船、ゴールデン・マリー号の諸君。この船は我々が頂いた。大人しく降りていただきたい。抵抗すれば……その命、無いものと思え」

その言葉を聞くなり、船員たちは各自脱出用の小舟で逃げ出した。奴隷によって得られる利益よりも自らの命を取ったようだ。

彼らが立ち去ったのを見計らって海賊たちは次々と乗り込んだ。

檻に閉じ込められていた者たちを全員助け出し、船の甲板に集めた。「我々はお前たちを売り飛ばす気はない。元の場所へ送り届けよう。もし男の中で我々の仲間になりたいという者がいれば、あとで聞こう」

船長、ロイはそう言うのと、自分の船に戻ろうとした。だが、直属の部下によって遮られた。

「大将、いっちゃん奥の部屋に相当衰弱した”人魚”さんがな、寝とったわ。乱暴された跡もないところを見ると、一応、閉じ込められただけじゃろうが、真っ暗ん中にずっとおったけえかね」

ロイはやや急ぎ足でそこに向かった。最奥まで来ると真っ暗で、夜目が効かなければ歩くのもままならないだろう。扉の前に待機していた部下を下がらせ、ロイは中に入った。

中には暗闇の中でもはつきりとわかるほど光り輝く美しい白金色の髪をした少年が横たわっていた。部下の言っていたように弱っているのかロイが入ってきてても反応すらなかった。

「もし、しっかりしなさい」

ロイが声をかけるが反応はない。痩せた体を見る限り、出された食事も満足に摂らず、拒み続けたようだ。きっと栄養失調にでもなっているのだろう。

ロイは少年を背負うとそのまま、自分の船に戻った。ロイの船には船医がいる。彼なら一応大丈夫だろうとロイは思ったのだ。

「軽い栄養失調だ。それに睡眠不足と心労が祟ったんだろう。しかし、”人魚”なんて珍しいもの、よく見つけたな」

船医は興味津々な様子で、”人魚”を見た。”人魚”の外見的特徴としては肌が白く滑らかで、非常に華奢であるということだ。この少年はそれをよく表している。

”人魚”は全体的に数が少ない。それは人間たちによる捕獲が相次ぎ、繁殖力も極めて低いため、元々多くなかった数がさらに減少したからだ。獣人族は基本的に”人魚”とは友好関係にある。獣人族は彼らを保護し、その見返りに知恵と能力を借りていた。”人魚”の能力は歌声にある。ある者は病気を治し、ある者は雨をも降らす。”人魚”の捕獲が進んだのはそのせいもあった。

この少年も幼い頃に拐われたんだろうか。そう思うと、ロイは自分に彼を守ってやれるのか不安になった。

「汗を拭いてやったり、しばらくは食べ物も受け付けないだろうから、栄養価の高い果物の汁、動物の乳なんかを飲ませておけば大丈夫だろう」

その様子を見かねてか、船医は船長の肩に手を置いてそう言い、他の奴隷たちの健康診断に向かった。

残されたロイは少年の枕元に置いてあったタオルを手に取り、室内の洗面台で、それを湿らし絞ると、少年の顔から順に上半身を拭

いていく。そして、部下に持ってこさせた果物を布に包んで口元で
少しづつ搾る。これを毎日三日間続け、ロイはほとんど寝なかった。
部下には心配されたが、休む気になてなれなかった。普段の彼は
そんなことはしないが、一体何がそうさせるのか彼自身もよくわか
っていなかった。

看病の甲斐あってか、少年の意識が回復した。

「目を覚ましましたか？ 良かったです」

「ここどこ。僕は奴隷船に連れ込まれて檻に入ってたはずなんだけど」

無理に起き上がろうとする少年をロイは止めた。

「無理に動くと身体に障ります」

少年もそれがわかつているのか大人しく引き下がった。

「自己紹介まだでしたね。私はロイ。ロイ・カーランド。よければ、あなたの名前を教えてください」

「ユノだ」

少しぶつきらぼうではあったが、名乗ってくれたところを見ると、ある程度は心を開いてくれたようだ。

「君だろうか？」

ユノが口を開いた。

「汗を拭いてくれたり、果実の汁を飲ませてくれたり……それと、ずっと手を握っててくれたりしたのは」

「そうですが、なぜそれを？」

ロイは不思議に思った。ユノは意識を失っていたはずで、誰が世話をしていたかなど知りようもないはずだ。

「なんとなくだよ。決め手と言え、君の目の下の隈かな。寝てないんだよね」

言い当てられて、ロイは複雑な心境になった。心配されると思ってもみなかった。

「心配ありません」

少しばかり突き放した言いぐさになってしまったが、ユノにはしっかり休養してもらい、健康であってもらわねばと思っているロイにとっては仕方ないことだった。だが、ユノも大して気にしている

風もなく、敢えてそう 見せているのか、本当に気にしていないのか、推し量ることは難しかった。

すると、急にユノがうとうとし始めた。

「すまないが、僕は眠いので、寝てもいいか？」

意識を取り戻してすぐに話し始めたからか、身体への負担が大きかったようだ。そう言って、すぐに寝息を立て始めたので、ロイはシーツを腹を壊さないようにかけ直してやり、しばらくその場を動かなかった。

ロイ自身も船をこぎ始めた頃、扉を叩く音がして、一人の少年が入ってきた。

「大将！ 人魚さんはどうなっとんかいね」

騒がしく入ってきたため、ロイはユノが起きるのではないかと心配したが、ユノは微動だにできなかった。

「ジャン、もう少し大人しくできないんですか……。 ”人魚” は寝てしまいましたよ」

ジャンと呼ばれた少年は残念そうに肩を落とした。

「にしても、きれいな顔しとるわ。さすが、お人形さんみたいじゃない」

あまりにもまじまじと見るので、ロイはジャンの視界を塞いだ。

「何すんや。見えんじゃん」

「見えんじゃん”ではありませんよ。何か私に用があってきたのではないのですか」

ロイが尋ねると、ジャンは用事を忘れていたようで、しばらくうねって思い出したのか話し始めた。

「そうじゃった。奴隷船に乗ったやつらでな、仲間になりたいつつーのが三人くらいおったんで、役に立ちそうじゃし、入れたいと思うてな。大将に見極めてもらいたいんじゃが」

ジャンはユノをちらっと見て、話を続けた。

「ま、でも、人魚さんの面倒で急がしそうやね」

「いや、大丈夫ですよ。ここはキースが守ってくれていれば」

先ほど、奴隷船でユノがいた部屋の前で見張りをしていた部下を呼んで、部屋に不審者が入らないように見張らすことにした。

三日前に船一杯にいた奴隷にされていた人々は、幸いそう遠くないところから連れてこられていたので、近くの港から信頼できる運び屋に送るように頼んでおいた。残ったのは、ジャンが言っていた三人だけだった。

「こいつらなんじゃが、仲間にしてもええかね」

「いいだろう。ちょうど、船員を増やそうと考えていたところだ」

三人は入団が決まったので、とりあえず、船長には事前に自己紹介することになった。

「俺はアラン。村じゃ、一番の力持ちで通っていた。年齢はもうオッサンだが、若い者に負けなと思うっている」

三人のうち、一番身体の大きい者が始めた。アランという男は自分でオッサンというほど、老けている印象を受けず、若々しい。「ぼくはネロっていいます。帝都でコックをしました」

気の弱そうな痩せ型の青年は隣のアランのせいで余計に小さく見える。ネロはロイと視線が合うとすぐに目をそらした。人見知りもあるようだ。

もう一人は、男の格好をしてはいるが、どう見ても女だった。

「レディ、この船は男所帯だ。不自由かけるかもしれないが、大丈夫だろうか」

「女扱いはよしてくれ。アタシはターニャ。それでも、傭兵ギルドに所属してたんだ。行く宛もなけりゃ、帰るところもないのさ」

船の空き室は今回ですべて埋まった。元々いた四人と今回入った三人、そして、ユノを合わせた八人が、船に乗ることになった。

03. (前書き)

少し間が空きましたので、長めです。誤字脱字等、何かありましたら、よろしくお願いいたします。

03.

まず、彼らがしなければならぬことは”人魚”をどうするかということを決めることだった。新しく入った三人を除く者で話し合いが行われた。

「私は彼が望むのなら船に乗せてもいいと思っている」

そう言ったのは、船長であるロイだった。もちろん、それに反対する者はいなかった。だが、扱いをどうするのかという問題があった。

獣人の中では”人魚”は守るべき者として決められていた。彼らは獣人と比べると、体力も筋力も劣るため、重労働は任せられない。乗せるならば、何かしら仕事を請け負ってもらわねばこちらが困る。「彼の体力が回復次第、意思を尊重した上で改めて考えよう」

本人のいない話し合いでは解決しない問題だった。

ロイはユノの様子を見に行った。ユノはすでに起きていた。ロイと目が合うと笑みを浮かべた。

「ありがとう。おかげですっかりよくなったよ」

感謝の言葉を述べて、頭を下げた。

「ところで、今後の身の振りなんだが」

「ちょうど、それについてうかがおうと思ってました」

ユノの言うことにはこのまま継続して船に乗りたいとの事だった。しかし、力仕事が難しかったため、ほかに探さねばならなかった。

「そうだ、僕は自然に関してはこちらと詳しい。風を読むことも潮の流れを読むことも獣人よりは秀でているはずだ」

この願い出はロイを始めとするこの船の乗員にとって嬉しい限りだった。

「それはとても助かります」

つい最近、航海士が船を降りてしまった。彼はかなりのベテラン

で、高齢でもあった。体力的に長い船旅を過ごすのには辛いと船を降りた。ロイとしては早く新しい者を見つけようと思っていたところだった。

「じゃ、それで決まり。あと、知っておいてもらいたいことがあるんだ」

ユノは話し始めた。

「僕、実は女なんだ。あ、これは結構重要事項ね」

ロイは困惑を隠しきれなかった。三日間、ユノを世話したのは彼だった。そのとき、ユノが男であるときちゃんと認識したはずだ。それは間違いなかった。ユノによれば、今の姿は仮初めに過ぎず、本来はれっきとした女であるらしい。

「ま、信じられないのもムリないね」

少し悩んでユノはあることを閃いた。

「実際に戻ってみようか」

指をパチンと鳴らす。すると、ユノの姿が縮んで、かわいらしい娘がそこにいた。髪もベッドの上から滑り落ちそうなほど伸び、しかし、美しい輝きを見せていた。

ロイは女性だったのかと認識すると同時に、女性の素肌に触っていたのだと思うとなんともいたたまれなくなる。

「すみません、そうとも知らず」

ユノはその言葉を遮るように言う。

「いいんだよ。仮初めとはいえ、あれはれっきとした男の姿だからね。生まれたときは、女であるには違いないけれど、人魚に性別なんて有ってもなくても同じだから」

人魚というものは元来性別がない。好きになった相手が男であれば女に、女であれば男に。姿を変える。別にそうでなくとも可能ではあるが。

この事実がロイにとって衝撃的だった。現にほとんどの者が知らないし、どこにも記されてはいなかった。

「船に乗る上でどっちの姿のが、都合がいい？」

ターニヤがいる以上女一人にはなりえないし、襲う輩もないだろう。出会ったときが男だったため、他の船員にも混乱させたくはない。ロイは悩んだ。

「言い忘れてたけど」

思い出したようにユノは言う。

「今回はよかったんだけどさ——たぶん、身体の調子が変わたと性別がごろごろ入れ替わるなんて事態も起こりうる。その場合の保険として話したんだ」

ロイの悩みなど吹っ飛んだ。ならば、船員にも話しておく必要性が十分にある。

「貴女はそのまま女としていてください。一人だけではありませんが、ターニヤという獣人族の女性もいます」

ターニヤは新入りではあったが、気が利くし、よく働く。気前はよく、竹を割ったような性格で、頼りがいのあるそんな女性だった。細やかな気配りもできるため、ユノを支えてくれるだろうと思った。「きっと仲良くなれるでしょう」

ユノも嬉しそうに微笑んだ。

「ところで……」

ユノは自身の髪を掬った。

「髪、邪魔だね。切ろっかな」

ハサミない？

そう言われて、ロイは必死に止めた。美しい髪を切ってしまうなどとてもないことだとユノを説き伏せる。

代わりに髪を結うことにした。ロイは自分用に持っていた髪紐を二本用意した。ユノの髪を二つに分けて器用に編み込んでいく。長さが長さのために頭の上で団子を二つ作って髪を引きずることのないようにする。その馴れた手つきにユノは疑問を生じた。

「やけに馴れてるんだね」

「ああ、それは、妹がいたので、幼いときによく結ってやってたんです」

一瞬、ロイの表情に影が差した。ほんの一瞬だったためにユノも見逃してしまいそうだった。ユノは気づかないふりをした。何か深い心の傷を抉ってしまいそうで、出会ったばかりの自分ではどうにもできないのだと感じていた。

「妹か、僕にも弟がいるよ。年が離れた可愛い弟が。最後に見たのは歩き始めた頃だったからさ、たぶん、記憶にもないだろうけど」

「それから会ってないんですか？」

「陸^{おか}に遊びに出たら拐われちゃったんで。……もうできた？」

いとも簡単にユノは話す。自分の運命を受け入れてしまっているようだった。反応すべきかどうかロイは迷ったが、こうもあっさり流されてしまうとうどうにもできない。気にしないことにした。

仕上げに髪紐でくくって、できましたよ、とロイは手鏡を渡す。

ユイはその出来映えに驚いた。

「これどうなってるの？ 全然わかんないや」

髪は非常に綿密に編み込まれてあり、どうなっているか容易にはわからない。聞いたところで、ロイは曖昧に微笑むだけだった。

「さあ、皆に会いに行きましょう」

ユノは着替えを渡された。

「それに着替えてください。廊下で待ってます」

確かに今着ている服は大きくて不恰好だった。これじゃ、皆の前には現せられない。

着替えて表に出るとロイはユノの手をとった。ずっとベッドの上にいたため、足腰が弱っていたのだ。本当は抱き上げようとも思っていたが、やんわり断られた。腰に手を置くことは許されたので、転けないように階段では役に立った。

「初めまして。ユノといいます。一応、人魚です」

皆、ユノには友好的だった。先ほどロイと話した内容は彼が簡単に説明し、船員にも伝えられた。

「人魚さん、かわええのう。友好の証にぎゅっとさしてくれんか」

ユノに抱きつこうとしたジャンは隣のキースに殴られてのびた。そうでもしないと黙らないからだ。すぐに復活し興奮も収まったか静かになった。

「……冗談じゃがね」

ジャンの耳が垂れ下がっている。ユノは獣人特有の耳と尻尾に興味をもった。知識では知っていても、百聞は一見にしかず。本物を見るのは初めてで、人間に囲まれていたユノにとっては新鮮だった。「質問してもいい？」

どうぞ、とロイが返事すると、じゃ遠慮なくとユノは目を輝かせた。

人魚は古の記憶を代々受け継ぐため、この世界の知恵者であるが、探究心も旺盛で、気になることには納得するまで調べる癖がある。

「みんなは耳と尻尾を出してるけど、納めたりできるの？」

「そりゃ、できるけど」

ジャンが率先してやってみせる。指を鳴らすと一瞬にして消えた。代わりに耳は人間の耳になっていた。

「すごい。耳が変わった。獣の姿とかなれる？」

ロイがキースに視線を向けると彼はうなずき、飛び上がったかと思うと、後ろに一回転し、着地したときには大きな漆黒の豹やまいぬであった。

触ってもいいかとユノが尋ねると、キースはうなずいた。背丈はユノよりも頭一つ分大きく、非常に頑強だった。

「獣人ってみんなできるの？」

「ええ。私は半人間^{ハーフ}なので無理ですが」

人間との子は基本的に人間であるが、稀に獣人の形質を表すことがある。それが、ロイだった。生まれたときは人間であったが、十を迎えた頃に覚醒してしまい、母親が父親と相談し、彼の命を守るために生まれ故郷に送ったのだ。

獣人は人間は苦手だが、ハーフには寛容であった。ロイは叔父夫妻に育てられた。

「だからといって、支障ないですが」

むしろ、役に立っているといい。獣人は人間の姿をとるのが苦手だ。驚いたり、ひどく弱っていたりすると耳や尻尾が戻ってしまう。しかし、その点、ロイは完璧だった。人間の町に出るときは何が起きようとも失態を犯すこともない。

「便利なもんだね」

ユノは感心するしかなかった。

皆が何族なのか教えてくれる中、船医——ウィルは何一つ話さず、耳や尻尾さえも常に隠していた。皆によると決して教えてくれないらしい。ただ、ロイは何か知っているようで、笑っていた。ウィルはロイが何か言わないか気にして、彼を睨み付けていた。

「ウィル、いい加減、あきらめたらどうですか？」

とうとう観念して、ウィルは正体をさらした。今まで誰もここまです執拗に聞きただしたりはしなかったらしい。彼はヒツジ族だった。

「え、ヒツジなん!？」

まず驚いたのはジャンだった。だから、ヤだったんだ。ウィルの不機嫌顔はますます険しくなる。

「ヒツジの姿になってくれない？」

期待した目でユノはウィルを見た。ほかの者もやはり見てみたいと思っているらしく、それを制止するような野暮な者は誰もいなかった。

った。案外、押しに弱いウィルは結局負けた。指を鳴らし、一瞬のうちに、姿を変える。

普段のウィルからは想像できない愛らしい姿だった。ロイはその無力な姿が可笑しくて笑うのをやめることができない。

「めえー、めえ（やめろ、バカ）」

ユノはウィルを抱き上げて、毛皮をもふもふとさわる。ウィルは抱きかかえられているため、元に戻ろうにも戻れなくなっていた。

ロイはユノが打ち解けたようで安心した。ずっと囲われていたユノに居場所を与えることはできただろうか。少し不安だった。様子を見る限りそれは杞憂に終わったようだ。しかし、この船に乗ってから自分しか映していなかった瞳が他の者を映していると思うと、黒い感情が沸いて出る。

ユノはふとこう言った。

「えと、今、どこにいるの？」

奴隷を近場の港に置いて、自分達は本拠地^{ホーム}へ向かっていた。町の皆に新入りを紹介しようと思ったからだ。あとは航海士がいなかったため、早めに帰ろうとしたからだ。一応、航海術はたしなんではいたが、自信がなかった。現にゴールデン・マリー号がいるという連絡が入ったときでさえ、航路を見失いかけた。こんな恐ろしい思いはたくさんだと思った。

「もう見えてますが、私たちのホームです」

すでに港が見えるところまで来ていた。町の子供の何人かがこちらに気づいて手を振っている。

港に着くと、ロイの元に駆け寄った。

「せんちょー、おはなしきかせてー」

そう言って、ロイの隣にいたユノの存在に気づくと、目を丸くした。

「だれ？ めがみさま？」

肌が浅黒や象牙、または褐色の獣人や人間にはない透き通りそうな白、まさに――。

「ごめんねー、女神様ではないんだ」

ユノは子供に優しく答えた。子供にすれば、つまらない答えだったかもしれない。ロイはすねた子供の頭を撫でた。

「ユノは、船長の大切な仲間ですよ」

自分で言っておきながら、少し照れる。表情には出していないはずだ。問題ない。

「さあ、子供たち。家に帰んな。おかあが呼んでるよ」

トラ族の女性が声をかける。子供たちは元気よく返事をして、それぞれのように帰った。彼女はこちらに向かってくる。

「はぁーい、新入りさん。初めまして、ロイの母でーす」

先ほどまでとはうってかわり、非常にくだけた態度になった。ロイは抱きつく彼女を引き剥がし、向き直る。

「誰も貴女の息子になった覚えはありませんが」

すぐ近くの酒場の女将で、自分の家の管理人なのだと簡単に説明した。見た目のわりに年のいった彼女には恋人が五人いた。さっきから新入りのアランに色目を使っているのはわかっている。ロイはため息を吐くと、新入りに金を持たせて家を借りるよう指示した。海から戻ったとき、やはり、自分の家があるのはいいと思ったからだ。ユノはまた拐われでもしたら不安なので、ロイは自分の家におくことにした。

あとは自由解散で、一週間後、またここに集まることを決めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9856u/>

白金の歌姫

2011年9月26日03時22分発行